

学びをつなぐ教育課程の創造

—子どもと教師で共につくりだす生活—

～1年次～



昨年度までの研究から…

昨年度まで、「自分のよさや可能性に気付く保育の在り方を探る」という研究テーマのもと、幼児一人一人の「自分のよさや可能性に気付く姿」を丁寧に見取り、その姿が立ち現れるためには、どのような援助や環境構成が必要か考えてきました。

そのなかで、幼児一人一人の「よさや可能性に気付く姿」は、本園の教育課程や指導計画を掲載している「保育の手帳」の中に記載されている、「かもしだす雰囲気」と重なることが多いことに気付きました。

そして、保育の手帳に立ち返る大切さを再確認しました。

※かもしだす雰囲気とは…教育目標をもとに再考した幼児や教師自身、周りの環境などからその時期に漂ってくる雰囲気を、幼児の気持ちに沿った言葉として表現したもの

研究テーマを考えよう

「保育の手帳」の中で、今の幼児と同じ姿と、今の幼児とは違う姿があるね。

新たな幼児の姿もあるから、書き加えたいね。

○幼稚園教育要領の改訂を見据えて教育課程・指導計画（保育の手帳）を創造していきたい。

子どもが中心だけれど、教師も一人の主体として関わることが大切だね。

○教師も主体的な存在として、意図をもち関わることで、幼児の姿がどのように変化していくのかという視点をもって、探りたい。



年齢毎の育ち、期毎の育ちが、つながって積み重なって学びになっていくのかな？

○日々の遊びや生活の中で、幼児の学びとは何かや、幼児の学びを育むための教師の願いや援助について探りたい。



令和7年度 大阪教育大学附属幼稚園

【研究テーマ】
学びをつなぐ教育課程の創造
—子どもと教師で共につくりだす生活—

子どもの「学ぶ姿」とは？

まずは、本園における子どもの遊びの中で「学ぶ姿」とは何かを話し合い、共通の認識をもつことにしました。本園の平成21年度の研究では、学ぶ姿の循環を捉えてきました（以下の図）。また、この繰り返しの、友達との関わりが加わることで、学びがより深まったり、広がったりするのではないかと考えました。

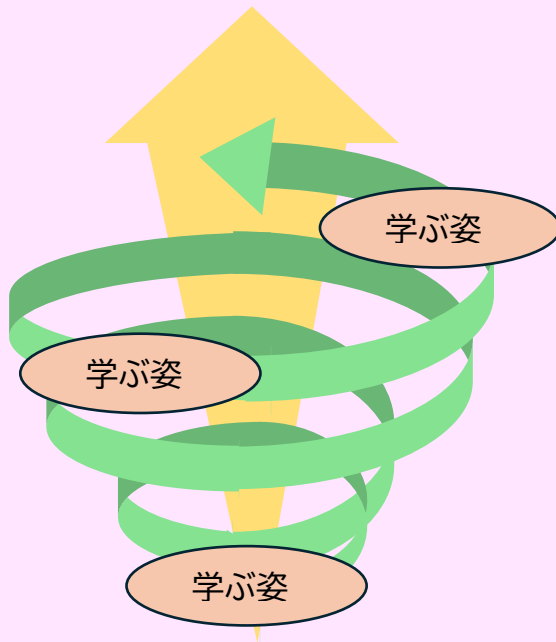


出典：大阪教育大学附属幼稚園研究紀要21

私たち（教師）は、子どもたちに何を願って援助や環境構成をしているだろう？



一方で私たち教師は、子どもたちに何を願って、援助や環境構成を行っているのか、改めて考えてみるために、教師が意図的に関わり、遊びの中の学びとして捉えた姿の写真を持ち寄りました。写真を見ながら、どのような背景や子どもの姿があったのか、その時に教師は何を願って、どのような意図で援助や環境構成をしたのかを話し合いました。話し合う中で、保育は子どもが中心の営みであることを再確認しました。そして、子どもの学ぶ姿は積み重なり、つながり合っていることが見えてきました（右の図）。



各学年の保育を見る視点を考える

子どもの姿の写真を持ち寄って、その時の背景や子どもの姿、その時の教師の願いや意図、どのような援助や環境構成をしたのか話し合う中で、それぞれの学年で大切にしていたことが見えてきました。

3歳児

- ・安心できる援助や環境構成
- ・子ども同士のゆるやかなつながりを支える援助

4歳児

- ・やってみたいと思える援助や環境構成
- ・子ども同士の多様なつながりを支える援助

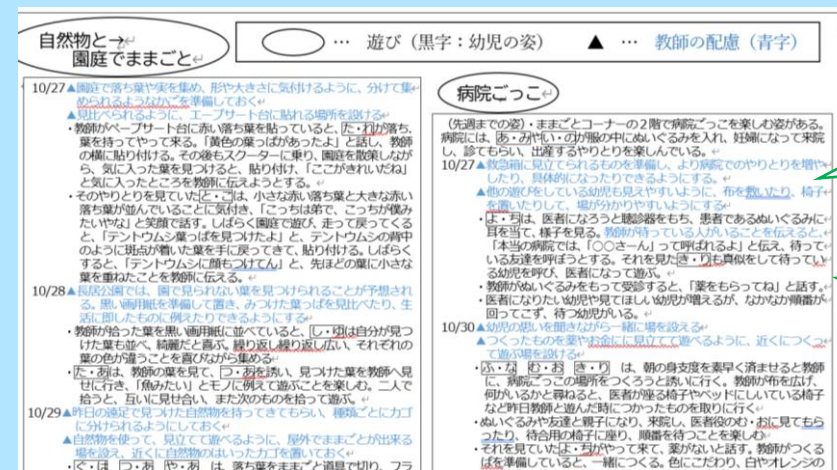
5歳児

- ・思いを叶える援助
- ・遊びを楽しくするために、考えを深めたり、友達の思いに気付いたりできるようつなぐ援助

これを、“保育を見る視点”と呼ぶことにし、この視点も参考にしながら保育を考えたり、振り返ったりすることにしました。

日々の記録の仕方考える

日々の記録の形式について話し合いをし、週日案の裏面に、遊び毎の学ぶ姿を捉えて、細かく記録するようにしました。その際、教師の願いや意図、どのような援助や環境構成をしたのかを、青字で記述するようにし、教師が何を願って援助や環境構成をしたのかが分かりやすくなるようにしました。それによって、明日以降の保育を構想する際に、必要な援助や環境構成を考える手立てとなり、保育の質を高めることにつながりました。



・子どもの姿、遊びの様子（黒字）

▲教師の願いや意図、援助や環境構成（青字）

園内研修でお互いの保育を見合う

今年度は学年毎に2回、計6回、お互いに保育を見合う園内研修を行いました。保育を見る視点を基に、お互いの保育を見合い、子どもの姿を捉えたり、教師の援助や環境構成について話し合ったりしました。話し合いをする中で、保育を見る視点と実際の子どもの姿がずれていると感じた時には、保育を見る視点の見直しも行いました。また、お互いの保育を見合うことで、それぞれの学年の子どもの育ちを捉えたり、子どもの姿を見取る新しい視点を得たり、それぞれの教師のよさを伝え合ったり、保育をより豊かなものにしていくために考えたりする機会にもなりました。

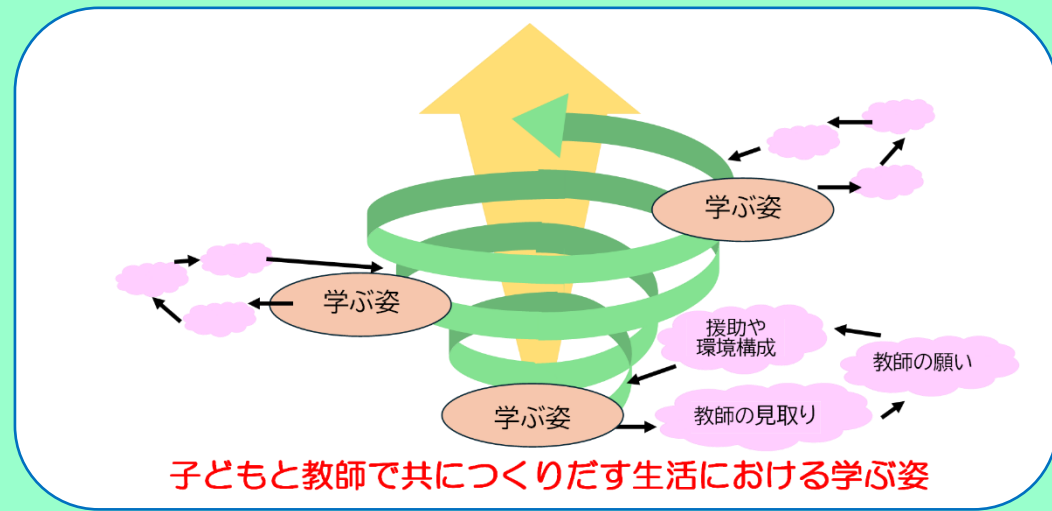
研究の内容

～研究で捉えた子どもの学ぶ姿～

子どもと教師で共につくりだす生活における学ぶ姿

私たち教師は、何を大切にしながら援助しているのか、前述の学ぶ姿を捉えた図を基に考えました。教師は、子どもたちの遊びを見守り、何を学んでいるのかを見取りながら、援助や環境構成を考えていきます。その中で、教師も一人の主体的な存在であり、その遊びの中に学びを見取り、意図をもって子どもに関わることで、幼児の姿がどのように変化していくのか振り返ります。それが、「子どもと教師で共につくりだす生活における、子どもたちの学ぶ姿」なのではないかと考えました。

この考えを基に、前ページの図を以下のように改訂し、日々の遊びを捉え直しました。そうすることで一人の子どもと教師の関わりが捉えやすくなり、その時の援助や環境構成はどうだったのかと振り返ることができます。



しかし、子どもの遊びは一人で成立しているものではありません。近くにいる友達の存在や遊びから刺激を受けて変化しています。また教師も意図的に友達の存在を気づかせることもあります。今後この図をふまえて、友達の姿も考えていきます。

事例検討では、教師が子どもの姿を捉え、それに対して、意図的に遊びに関わった出来事に注目し、子どもの遊びから学びがどう考えられるかを捉えました。また、その中にどのような教師の思いや願い、援助があったのかを、各学年の保育を見る視点を基に、複数の視点から検討しました。

2学期11月頃の事例を3学年で比べたときに、年齢による違いが見られました（以下の表）。事例から、子どもが遊びの中で学ぶ姿、そこから立ち現れるかもしだす雰囲気、遊びの中で子どもたちが物や人に関わろうとしていく際のきっかけ、遊びながら学ぶ際の土台や、支えになっているもの、そして教師の援助をまとめました。これらは全員に当てはまる訳ではありませんが、個々にこのような学びを見出すことができ、個々に合わせた援助や環境構成が必要になると考えます。

今後、各期の実践事例を基にそれぞれの表を作成し、新たな教育課程の創造に活かしていきたいと考えています。

実践事例から（2学期、Ⅳ期・11月～12月頃）

	かもしだす 雰囲気	関わりが うまれるきっかけ	学びの土台	援助
3歳	ちょっと やってみよう	諸感覚を使った 音や動きの共有	・共感してくれる教師の存在 ・友達とのゆるやかな つながり ・諸感覚を揺り動かす 環境構成	・安心・安定した関係 ・遊びと生活の連続性
4歳	おもしろそう！ やってみよう	ものへの意味づけ	・個々の好きややってみたい 思い ・特定の友達とのやりとり	・個々の学び方や興味・関心に合わせた 関わり ・教師も遊び仲間の 一員として ・友達同士をつなぐ 関わり
5歳	こんなこと かんがえたよ みんなで あそぼう	イメージの共有	・これまでの生活経験 ・友達の思いがわかる ・共通の目的が生まれていく	・教師や友達からの 認め ・より本物らしい 素材の提示

1年次の成果と課題

1年次の研究の成果

- ・子どもの学ぶ姿について、教師の援助や環境構成のあり方に着目して整理することができた。
- ・保育を見る視点を明らかにすることで、年齢に沿った保育や関わりについて、振り返ることができた

2年次に向けて

- ・今年度の見直しを新たな教育課程の創造へ
→今年度見いだした「学ぶ姿」「保育を見る視点」を基に創造していく
- ・「学ぶ姿」の理解
→友達の存在、教師の援助・環境構成をふまえたものを検討してする
- ・期ごとに事例を読み解く
→かもしだす雰囲気や学びの土台を捉え直し、教育課程の創造へつなげる

実践事例の検討を通して捉えた学び

子どもの「学び」を捉えた姿とその姿を支える教師の援助と環境構成

<保育を見る視点> ・安心できる援助や環境構成
・友達とのつながりを支える援助

(3歳児 IV期
12月)

かもしだす
雰囲気

子どもの言葉

教師の声掛け

子どもの姿
教師の見取り

・教師の思い
▲援助、環境構成

12月上旬(午前中の姿)

- ・ドングリで遊んでいる中で、器に入れると音が鳴ることに気付いた。そこから、素材の中に自然物を入れて音の鳴るものをつくって遊ぶ姿が増えてきた。
- ・A児は、教師(以下T)が楽器の場から離れると、自分の楽器を手に持ち、後ろをついて歩いている。



A: 先生!
昨日つくったよ!

素敵だね!
見せて見せて

- ・A児は、友達の前で歌ったり踊ったりすることに恥ずかしさを感じている。一週間前、自分の好きな歌をTの前で歌って見せる姿があった。すぐに音を鳴らせるような楽器をつくり、友達と鳴らして遊ぶことを楽しんでほしい。
- ▲A児も楽器をつくり遊ぶことに興味を持ち始めたが、A児にとっては目新しい遊びである。少し不安を感じている様子なので、Tと一緒に遊ぶようにする。

- ・A児は2つ目をつくると、Tに自分の楽器を一つ手渡し、一緒に鳴らして遊ぼうと、誘う。
- ・Tと一緒に遊ぶことや、Tが自分のつくったもので遊んでくれることが安心な様子だ。



A: 先生は、これ!

ありがとう!
一緒に鳴らそうか

- ・Tと一緒に遊びながら、表現する楽しさを味わってほしい。
- ▲思わず身体全体を使って音を鳴らしたくなるように、日頃から親しんでいる曲を準備しておき、Tと一緒に踊りながら鳴らす。

いい音だね

A: そうそう!
もっとつくろっか

次はどの材料を
使おうか

- ・Tの耳元で楽器を鳴らし、聞かせようとする。
- ・一つつくり、Tに認められたことから、自信をもっているようだ。

- ・もっとつくりたいという気持ちを支えたい。
- ▲すぐにつくって遊べるように、藤棚の周りにつくる場とステージを準備しておく。またTと一緒に素材を選ぶ。

ちょっと
やってみよう

(午後からの姿)

- ・A児は弁当を食べ終わると、すぐに楽器を持ち、庭に遊びに行った。午前中は自分からステージに立つことがなかったが、午後になると自らステージの上で遊ぶ姿があった。自信をもったことと、いつも一緒に過ごしているB児がいることで、「やってみよう」とできたのではないかと考える。

A: 先生、
こっちだよ!



楽しそうだね!
先生も、入れてー!

- ▲自信をもっている様子や友達とのつながりを大切にするためA児の思いに寄り添いTもステージの上で一緒に見守りながら遊ぶ。



A: 僕も紐を付けて!

いいよ!
どこに付けようか

- ・A児は、自分の楽器を手に持ち、紐を付けてほしいとTに伝えに来る。
- ・他の友達が楽器に紐をつけている姿を見て、「友達の真似をしたい」「自分もやってみよう」という思いが膨らんできているようだ。

- ▲A児の思いに寄り添い、つくることを手助けしながら、やってみようとした姿を認める声掛けをする。

関わりが広がるきっかけ	学びの土台
<ul style="list-style-type: none"> ・諸感覚を使った音や動きの共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・共感してくれる教師の存在 ・友達とのゆるやかなつながり ・諸感覚を揺り動かす環境構成

<考察>

3歳児にとって、教師の近くが安心できる場であり、一緒の場にいることや同じことをすることが安心につながると考える。また、徐々に友達とつながっていく中で、思わず同じ動きをすることで、友達と同じや、一緒に過ごす楽しさや安心を感じている。そうすることで、あまり経験していないことにも「やってみよう」という思いが出てくるのではないかと考える。

そのためには、安心して過ごせるよう教師は個々に寄り添うことが大切である。また、友達と過ごす楽しさやおもしろさに気づけるように、互いの姿が見えるように環境を整えたり、思わず同じ動きをし、楽しさを共有できるように、思わず体が動き出すような音楽や音の鳴るものを準備したりすることが、子どもたちの学びの支えになったと考える。

<保育を見る視点> ・やってみたいと思える環境構成と援助
・子ども同士の多様なつながりを支える援助

進級時、新しい環境を不安に感じ、泣いていることの多かった A 児は、虫が好きな B 児と虫捕りをして仲良く遊ぶようになり、次第に気持ちが落ち着いて園生活を送れるようになった。寒くなって園庭に虫がいなくなり、B児は保育室でものをつくって遊ぶようになった。そんなB児の傍で、A児は、B児の姿を見ながら、傍で過ごしていた。

・A児はB児の遊びに、憧れを持っていることが多いので、B児の遊びを支えることで、A児が遊びに気持ちが向けばと思い、TがB児と一緒に楽しそうに遊ぶことにしよう。

▲A児とB児と一緒に遊ぶきっかけになるように、A児に「テープを貼るから押さえておいてほしい」と、B児の遊びに関わりがもてるような声を掛ける。

A児は、B児のつくるものに関わり始めた。

B児は出来上がった消防車を持ってテラスへ出ていった。A児はTの傍に残った。

・今ならA児は、このままつくって遊ぶことが楽しめそうだなと感じ、A児の興味のある、虫に関連するものをつくらうと誘えば、A児は共感し、このまま遊びを続けていこう。
▲A児の関心のある、虫を捕る箱、虫捕り箱をつくることを提案してみる。

Tの提案でTとA児は、細長い箱をつなげて柄のようにし、先に四角い箱を付けて、虫捕り網のような虫捕り箱をつかった。出来上がり、A児が虫捕り網のように振ると、つなげた箱が途中で折れて壊れてしまい、A児は泣き出しそうになる。

・A児もB児と、また共通の遊びで楽しく遊べるようになるといいのになあ。

A：僕はできないからいい



A児

T：A君もつくれるよ

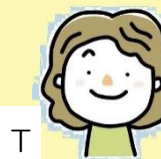
・苦手だと思わず、つくることを楽しめればいいなあ。



A：次は何したらいい?

T：A君、先生は虫捕り箱をつくらうと思う。一緒につくらない?

おもしろそう! やってみよう



T

A：虫捕り箱って何? 虫を捕る箱? じゃあ、できたら虫は僕が捕まえる。



A児

そこへB児がもどってきて、壊れた箱を見て「僕が直したる」と言い、自分の物のように手に取り、A児のつくった物に、テープを貼っていく。B児のその姿にA児は「それ僕の」とB児に言う。

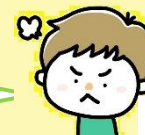
始めはTと虫捕り箱を修理していたA児だったが、隣で同じ材料で違うものをつくりはじめたB児の遊びに興味移っていった。そしてB児と同じようなものをつくり、一緒に遊ぶ姿が見られた。

B：僕が直したる



B児

A：これは僕の



A児

A児は自分のつくった物に愛着をもっている。また、A児もB児も、つくりたい思いがあるようだ。

▲それぞれの思いを大切にしたいと思い、全く同じものが使えるように、B児に、A児と同じ素材を用意する。

B：僕こんなにつくる



B児

A：僕もつくる



A児



▲二人で遊ぶ楽しさを感じるように、Tはその場を離れ、見守るようにした。そのことで自由なやりとりが生まれ、A児がB児のつくったものを真似て同じようにつくり、楽しむ姿が見られた。

関わりが広がるきっかけ

学びの土台

・モノへの意味づけ (虫捕りが好きなA児が、虫を捕るもの”をつくることに興味を持った)

・個々の好きや、やってみよう
・特定の友達とのやりとり

<考察>

教師は、A児との関わりの中から、つくる遊びに誘う声掛けだけでは、A児にとってなかなかやってみようと思えるきっかけにならないと感じていた。やってみようと思えるきっかけは、A児が興味のある遊びの虫捕りに関連するもので、それを行うためにつくるという、A児にとって意味のあるものである必要があると考える。

進級時、新しい環境に不安だったA児は、B児の遊びや、B児が展開していく遊びに関心をもった。B児と一緒に遊ぶことでB児の存在が安心感につながり、それが支えとなり、活動的に遊ぶ姿が見られるようになった。

友達との関係の中で、興味や関心を広げ、新しいことに挑戦しようとする姿を見取り、援助していくことが、子どもの学びの支えになっていくと考える。

＜保育を捉える視点＞
 ・やってみたいと思える環境構成と援助
 ・子ども同士の多様なつながりを支える援助

かもしだす
 雰囲気

子どもの言葉

教師の声掛け

子どもの姿
 教師の見取り

・教師の思い
 ▲援助、環境構成

10月20日

・手応えのある遊びを通して、自信ややりがいを感じてほしいな。
 ▲運動会のお土産として、天狗ぼっくりを一人一つずつ用意する。

幼稚園で自信をもって天狗ぼっくりに取り組み子どもと、「できない」と取り組みに消極的な子どもがいる。

・前向きに取り組めるように、気持ちを支えたいな。
 ▲Tと一緒に遊んだり、積極的に遊びに誘ったり、頑張りを具体的に伝えたり、クラスみんなで遊んだりする。

何度も挑戦しているね。素敵だね



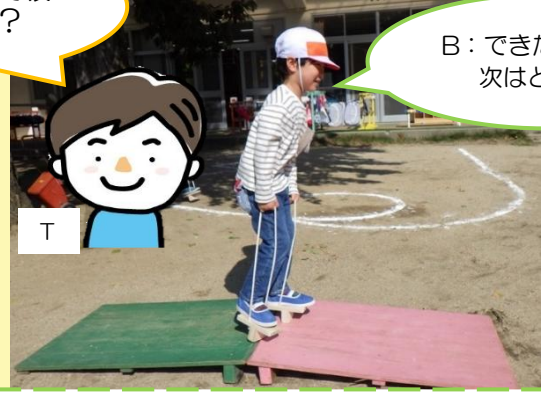
A: 先生見て! できたよ!

できるようになったことが嬉しくて、繰り返し遊んだり、友達と一緒に遊んだりするようになってきている。

10月27日

・天狗ぼっくりの遊びをもっと楽しんでほしいな。
 ▲遊びを少し難しくして、より手応えを感じて楽しめるように、巧技台や踏切台、ラバーフープなどを準備する。

天狗ぼっくりで坂道登れるかな?



B: できた! 次はどうする?

つなげた巧技台を橋に見立てたり、踏切台で坂道をつくったりなど、遊びを少し難しくして挑戦することを楽しむようになってきている。

・繰り返し遊べるようにしたいな。
 ▲ラインカーを準備し、自分たちでコースを描けるようにする。

コースをつくったら、おもしろそうじゃない?



B: グネグネとかあったらいいかな

10月29日

・みんなに天狗ぼっくりを楽しんでほしいな。
 ▲遊びのおもしろさを感じたり、やってみたいと思ったりするように、幼児の目に止まりやすい場所に遊びの環境を設える。

みんなおもしろそうなコースができたよ!



C: できた! もう1回!

できたことが嬉しくて、繰り返し楽しんだり、コースをつくり変えて楽しんだりしている。

10月30日

D: 今日もコースつくろう!

今日はどんなコースにする?

▲友達との関わりが広がるように、一人では扱えないような大きさや重さの道具を準備する。
 ▲危険がないように傍で見守りながら、力を合わせるよさを伝え、気持ちを支える。

おもしろそう! やってみよう



D: Eくんそっち持って。Fちゃんはこっち

遊びの楽しさを感じており、目的をもって登園するようになってきているな。

▲思いを叶えて、すぐに遊びに向かえるように、どんなコースか尋ねて、一緒にコースを設える。



力を合わせる時は声を出すといいよ。わっせ! わっせ!

F: わっせ! わっせ!



関わりが広がるきっかけ	学びの土台
<ul style="list-style-type: none"> 手応えを感じる遊びの環境 目に止まりやすい場所に環境を設定すること 一人では扱えないような大きさや、重さの道具を準備すること 	<ul style="list-style-type: none"> 根気強く取り組む友達の存在 気持ちを支える教師の存在
<p>＜考察＞ 天狗ぼっくりに何度も根気強く取り組み、できるようになると、嬉しくて繰り返し楽しむ姿が見られた。教師が頑張りを具体的に伝えたり、他の子どもに紹介したりしたことが、刺激となり、根気強く取り組む子どもが増えたように感じた。子どもたちが遊びに手応えを感じ始めたタイミングで、教師は、遊びを少し難しくする環境を設えた。そのことが、子どもたちの「やってみたい」という気持ちを刺激し、繰り返し挑戦したり、自分たちで遊びをつくり変えたりする姿につながったのではないかと捉えた。また、コースを設える道具を、あえて一人では扱えないような大きさや、重さのものにすることで、声を掛け合って運ぶ姿が見られ、子どもたちの関わりが広がることにもつながったのではないかと考える。 好きな遊びが見つけれず、不安そうにしていた子どもが、根気強く遊びに組み、「できた」という自信を支えに、したい遊びを見つけて遊ぶようになった。手応えのある遊びを楽しむ姿を支えることは、生き生きと生活する姿を支える援助になり、学びを支えるものではないかと考える。</p>	

<保育を見る視点>・思いを叶える環境構成

・遊びを楽しくするために、考えを深めたり友達の思いに気付いたりできるよう

かもしだす
雰囲気

子どもの言葉

教師の声掛け

子どもの姿
教師の見取り

・教師の思い
▲援助、環境構成

6月18日

・A児は昨年積み木や段ボールを使ってだんじりをつくって遊ぶことを楽しんでいたので、今年もだんじりづくりをするようになると思われる。
▲だんじりづくりの材料となるものをいくつか事前に用意しておく。

他の子どもたちがA児の姿を見て遊びに興味をもち、声を掛けてくる。A児は快く受け入れ、一緒に段ボール箱を切り始める。

他の子どもたちがそれぞれの思いで段ボールの箱を切る。

6月19日

他の子どもたちが、A児のだんじりへの思いを聞いたり、自分の思いを話したりしながらつくろうとする。A児は、友達の思いも受け入れている。

・友達と一緒に、話し合いながらだんじりをつくることを楽しんでいるので、このまま見守ろう。
▲クラスの友達が興味をもって遊びに参加できるように、降園時、だんじりづくりについてA児たちが話す機会をもつ。

A: だんじりをつくりたいから、段ボールがほしい



A: いいよ

他児: 一緒につくりたい



A児

▲A児と一緒に、子どもが乗れるだんじりがつくれる大きさの段ボール箱を倉庫に探しに行く。



A: ちょっと待ってそこは切らないで

B: どうして?

C: ここは、こうしたら?



A児

A: そこは、こうしたいから

・友達と一緒にだんじりをつくるために、互いに考えを話したり聞いたりしながらつくっているため、様子を見守ろう。

F: だんじりって何?

A: 本当に乗れるだんじりをつくってるよ

D: ここ、切ってもいいかな?

G: 家でも、お祭りの太鼓が聞こえるよ

H: おもしろそうやってみよう!



A児

よっといで
あそぼうよ

6月20日

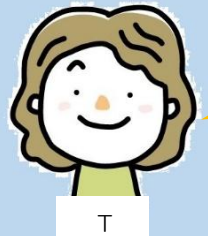
A: 太鼓があったらいいのにな



友達が乗っただんじりを押したり引っ張ったりして動かそうとするが、段ボールが破れそうになり、A児が止める。「じゃあ、どうすればいいん?」と言われ、どうすればいいか分からず、黙り込んでしまう。しびれを切らした幼児が、強引に動かそうとしていざこざになる。

・本物のだんじりと同じようにしたいと思っているので、道具探しを投げかけてみよう。
▲本物のだんじりのようにするために必要な太鼓や台車、紐などは事前に用意しておき、幼児が必要としたタイミングで一緒に探して出すようにする。

6月26日



T

どんなものがあるかいいのかな?

探しに行こうよ

台車を見つけて来て、乗せる。



・本物のだんじりのように、飾り(ちょうちん)も意識するようになってきたので、祭りらしいものを出してみよう。
▲祭りの雰囲気が感じられるように、また、友達と一体となって遊ぶことを楽しめるように、法被を用意する。

関わりが広がるきっかけ	学びの土台
<ul style="list-style-type: none"> ・イメージの共有 ・本物に近づけるための材料や道具 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いを伝えたり友達の思いに触れたりすること ・これまでの生活経験 ・共通の目的が生まれていくこと

<考察>
A児のだんじりがつくりたい、だんじりで遊びたいという思いを受けて始まった遊びであるが、地域の祭りであったことで、だんじりを知っている幼児は多かった。しかし、祭りの経験やだんじりに対するイメージの違いは大きかった。教師がその様子を見守りながら待つことで、幼児が話し合い、イメージを共有しようとする姿が見られるようになっていった。また、段ボール箱や太鼓、台車、法被など、本物に近づけるための材料や道具を幼児と一緒にそろえていくことで、他の子どもたちにもだんじりのイメージが分かりやすくなり、友達と一緒につくることや集まって遊ぶ楽しさを感じることができたように思われる。そして、自分の好きなことや自信のあることを通して、やりたいことを実現することや、本物のようのだんじりをつくりたいという共通の目的をもつこと、自分の考えを伝えたり友達の考えに触れたりしながらイメージを共有して遊ぶことが、子どもたちの学びにつながったと考える。



A: 太鼓を見つけたよ



A: やったー本当に動いた!

A: (町名を書いた) ちょうちんをつくらうよ

太鼓が好きな幼児が参加し、掛け声に合わせて鳴らす姿が見られる。

I: だんじりが来たよー

C: 乗りたい人、乗ってもいいよ!



